

発 達 2001

母親の育児ストレス：子どもの行動特徴と 家族社会的要因との関連

数井みゆき
日本学術振興会（お茶の水女子大学）

無藤 隆 園田菜摘 宇佐美芳子
お茶の水女子大学

目的

「育児ストレス」という概念が、子育て環境での1つの母親側の心理状態を表わす指標となって久しい。しかし、「育児ストレス」とは、包括的な概念で、その中には、直接子どもの行動や発達状態に対する懸念や心配、不安からのストレスと、親役割にとまなうストレスとに分けられるであろう。すでに、そのような観点から、Abidin (1986) は、Parenting Stress Index [PSI] を作成し、その日本語版は、野澤 (1989) によって妥当性が検討されている。育児ストレスの研究の目的は、(1)育児ストレスそのものが母親の心理的健康を損なう、つまり、母親を中心においた研究と、(2)母親が経験しているストレスが子どもの心理的な発達面に影響を与えるという、子どもを中心におくアプローチがある。

(1)に関しての育児ストレス研究では、そのストレスを軽減、また緩和する働きのある何らかのサポートに関連させたものが多い。また、乳児期の子どもの気質的な特徴との関連を探っているものもあるが、幼児期における子ども側の変数を取り上げたものは少ない。

本研究は、その母子の家族社会的な要因の検討（家族内機能度、夫婦関係の満足度、社会的サポート）と同時に、観察された子どもの行動特徴からも、母親を取り巻く子育て環境の中で、育児ストレスの現状を把握することを目的とした。

方法

被験者：東京、またはその近郊に住んでいる母子48組で、母親の平均年齢は33.7歳（幅：28.3～43.1歳）、子どもの平均年齢は3.4歳（幅：2.2～4.7歳）であった。実際に観察された子どものうち、男児は21名（44.7%）で、女児は26名（55.3%）であった。

手続き：家庭での子どもの観察を行う前に、母親からの回答を得るための質問紙のセットを郵送した。質問紙は、全部で5部から成る。家族全体がどのような特徴的な機能をしているかを測定するthe Family Assessment Inventory [FAI] (西出、1992)、夫婦関係の適合、満足度のthe Marital-Dyadic Adjustment Scale [MDAS] (Locke & Wallace, 1959; Spanier, 1979)、友人、家族（親類）などからの社会的支援の

the Interview Schedule of Social Interaction

Questionnaire [ISSIQ] (Hendersonら、1981) を用いた。さらに、フェイスシートで、父母の年齢、学歴、社会経済的状況、家族環境などをたずねた。育児ストレスの測定には、関西学院Parenting Stress Index [KGPSI] (野澤、1989) を使用して、子ストレス (e.g., 子どもの発達上の不安や問題行動への悩みなど) と親ストレス (e.g., 親役割からの制限など) にそれぞれ得点をまとめた。家庭訪問では、研究者によって、子どもの日常生活の場面が90分ほど観察された。その観察から、愛着の安定性の測定のためのQソート法 (Waters & Deane, 1985) を行った（今回の分析では、Qソートの各項目を子どもの行動指標としてそのまま用いた）。

結果と考察

子ストレスの高低には、心理的な指標ではなく、家庭環境的な要因が関連していた。父母の年齢の高いこと、結婚期間が長いこと、子どもの数が多いこと、観察の対象となった子の出生順位が遅いほど、子ストレスは低かった。また、子どもの行動面からは、母親に甘えるタイプの子ども（だっこを求め、抱かれることを喜び、母にまわりついて遊ぶなど）の母親は、子どもに関するストレスが低かった。

親ストレスに関しては、社会的なネットワークが十分あること、夫婦関係での満足度が高いこと、家族全体の関係がうまく機能していることなどが、親ストレスが低くなっていることと関係があった。加えて、子どもの数が多いこと、父親（夫）の学歴が高いことも親ストレスの低さと関連していた。子どもの行動特徴としては、親ストレスの低い母親の子は、なだめやすく、従順であり、乱暴でなく、母を頼りにするタイプであった。

子ストレスは、一言でいえば、子育ての経験が多くて、子どもが甘えん坊である（母親を必要としているという行動がはっきりしている）方が、ストレス度が下がった。親ストレスは、今までいわれてきたことを裏付けるように、夫を中心として、親密なサポートの整っている状態が、親役割から来るストレスを減少させているようであった。